

オープン・プリティクション



THE
OPEN
PREDICTION
PROJECT

THOMAS BAXTER

<日本語解説書>

THE OPEN PREDICTION PROJECT

「オープン・プリディクション」エピソード

(訳注:これは原書の「A BRIEF HISTORY OF THE OPEN PREDICTION」を要約、再構成したものです。「オープン・プリディクション」をめぐる興味深いエピソードです)

今やカードマジックの古典的テーマである「オープン・プリディクション」は、ポール・カリーによって提唱されたテーマであり、初めはごく限られたマジシャン仲間の中で議論されていたものです。当初は「ポール・カリーの未解決のカード・プロブレム(問題)」として知られていました。

彼のこのテーマへの挑戦の中で、カリーは予言のカードをエフェクトのスタートの時点で観客に堂々と見せておくことを考えました。客にデッキをシャフルさせたらカードをテーブルに1枚ずつ表向きに配り出し、客の好きな所でストップします。次のカードをテーブルに裏向きのまま置きます。客は残りのカードも表向きで配りますが、予言のカードは出て来ません。最後に1枚だけ裏向きのカードのフェースを見ると、それが初めに予言されていたカードに一致するというものです。この挑戦的アイデアを、カリーが少人数のマジック仲間に1948年に提案した時から「オープン・プリディクション」の歴史が始まります。

マジック研究家の中には、「オープン・プリディクション」の文字が初めて印刷物に現れたのはエド・マルローのTHE CARDICIAN(1953年後半)であると書いている人もいますが、それは間違いです。このカード・プロブレムへの言及は、その一つの解決法と共にPHOENIXマガジンの1949年12月号に掲載されたジェラルド・コスキーからブルース・エリオットに当てた手紙の中に見ることが出来ます。その手紙の中で、コスキーはこのカード・プロブレムが今、エリオットの外、ダイ・バーノン、ポール・カリー、ビル・サイモンそしてマーティン・ガードナーによって研究されていると述べています。そこにはマルローの名前はありません。

その後数年にわたるクレジットの問題が生じたのは、1953年3月のPENTAGRAM誌に「オープン・プリディクション」の二つの解決法が発表されてからです。フランシス・ハクストンの、「オープン・プリディクション」というテーマとの出会いとロンドンでの特別なマジシャンの集まりでそのテーマを発表したことを述べた記事の中で、ピーター・ワーロックの「ANGLE ON MARLO」とスチュアート・ジェームスの「ANGLE ON ANGLE ON MARLO」という二つの解決法を紹介したのです。しかしこれは題名を見ても判る通り、ポール・カリーではなくマルローの名前が前面に出ています。どうしてハクストン達は「オープン・プリディクション」とマルローを結び付けたのでしょうか？

これにはパーシー・アボットが絡んできます。パーシー・アボットはハリー・ブラックストーンと共に1929年にミシガン州コロロンにTHE BLACKSTONE MAGIC COMPANYを設立しましたが、うまくいきませんでした。パーシーは1933年に今度はリシル・ボードナーと共にABBOTT'S MAGIC MANUFACTURING COMPANYを立ち上げました。しかしこの経営も当初は苦しかったので、もっと人を集めてそこで商売をしようと考えました。こうして後に有名となる「ABBOTT'S GET-TOGETHER」という集まりが50人の客からスタートしたのです。次の年にはもっと人が集まり、商品も売れ出し、参加したマジシャン達の交流も始まりました。この「ABBOTT'S GET-TOGETHER」は恒例行事となり、規模も大きくなって現在まで続いています。

1949年8月のその大会にオスカー・ウェイグルが参加しましたが、実は彼は「オープン・プリディクション」の当初の研究メンバーの一人だったのです。彼はアボットの大会でエド・マルローと出会い、そこでポール・カリーの「オープン・プリディクション」のテーマを、ポール・カリーの名前と共にマルローに教えたので

す。これがマルローの研究心に火を点けました。

マルローは多くの研究を重ねて、このテーマの解決法と思われるものをいくつか考案しました。1952年8月の「GET-TOGETHER」にも参加しましたが、そこにはスチュアート・ジェームスとフランシス・ハクストンもいました。2人はマルローと会い、3人共カードマジックに情熱を持っていたのですぐに気が合い、徹夜で意見交換が行われました。この時マルローが、自分が研究してきた一つのカード・プロブレムについて語りました。それが「オープン・プリディクション」だったのです。

マルローはハクストンとジェームスに、心理的なストップ・フォースに基づいた一つの解決法を見せたりしましたが、マルローはなぜかこのテーマが、ポール・カーリーが提唱したものであるという事実を言わなかったのです。このためハクストンとジェームスはこれを「THE MARLO PROBLEM」として認識したのです。ハクストンはイギリスにもどり、マジシャン仲間にこのテーマについて語り、自分のやり方を披露しましたが、あくまでマルローの発案として紹介したのです。

ピーター・ワーロックはすぐに自分のやり方を考案し、「ANGLE ON MARLO」と名付けてジェームスに知らせました。ジェームスもまた一つの解決法を提案してきて、前述のとおりハクストンが1953年にPENTAGRAM誌に「マルローの挑戦」と言う言葉と共に発表したのです。

しかしPENNTAGRAM誌への発表以降、ハクストンの耳にはマルローが困惑しているとの情報が入ってきました。マルローはごく限られた仲間の間でのやり取りが外部に出たこと、それもマルロー自身がまだ何も公式に発表していない段階で記事になったことに困惑したのです。ハクストンはすぐに自分の間違いに気づき、マルロー、ワーロック、ジェームスに謝りました。ただ、不思議なことにこの段階でもまだマルローは「オープン・プリディクション」というテーマの提唱者がポール・カーリーであると開示しませんでした。このマルローの態度も疑念を呼びました。またポール・カーリー自身も自分のアイデアだと声を上げることはしていませんでした。しかしスチュアート・ジェームスは、この後すぐに「オープン・プリディクション」のテーマの提唱者が本当はポール・カーリーである事を知り、ワーロックとハクストンに知らせています。

マルローは、「すべては誤解によるものであり、確かにこのアイデアがカーリーのものだとは明示しなかったが、また自分のものだと言った事もない。また毎年のアボットの大会で演じて見せたやり方やその他のやり方は自分のオリジナルである」と言っています(ただ、アボットの大会でも一度もポール・カーリーの名前に触れることはありませんでした)。さらにその後の展開についても、ジェームスとハクストンの勝手な思い込みによるものだとも言っています。いずれにせよ1953年後半に出版された彼の「THE CARDICIAN」に至って、初めてポール・カーリーの名前が挙げられることになったのです。これでようやく騒ぎは収まりましたが、ここに至るまでの間、「オープン・プリディクション」の本当の提唱者を知っているダイ・バーノンやビル・サイモン、マーティン・ガードナー達が、マルローを中心とする一連の動きを批判し、快く思っていなかったことは確かです。

ポール・カーリーの提唱した「オープン・プリディクション」に対する完璧な解決法は、スチュアート・ジェームスによる「51 FACES NORTH」というエフェクトだと言われています。それを見る幸運に恵まれた人は、その異常なエフェクトが確かに演じられたと報告していますが、スチュアートはそれをマジシャン達相手にはあまり演じることはなく、そのやり方を公表することもしませんでした。自分の死と共に「墓場に」持って行ってしまったのです。「51 FACES NORTH」は、デビッド・バーグラスの「BERGLAS EFFECT」(究極のANY CARD AT ANY NUMBER)と共に二つの伝説のカードマジックとなったのです。

最後に、スチュアート・ジェームスが「51 FACES NORTH」を考案する時に課した条件の主なものを挙げておきます。

1. 借りたデッキでも出来ること。
2. 即席で出来ること。何のセットアップも要らないこと。
3. デックは常に見えていること。
4. デックに余分なカードを加えたり、取り去ったりしないこと。
5. カードの名前を書く時、予言である事を明言し、客が最初のカードを配る前に書くこと。
6. 結果がいくつも用意されていないこと。
7. 紙、ペン等、全て借りたものが使えること。
8. 客がデッキのトップから、1枚の裏向きカードを除いて全てのカードを表向きで配ること。
9. マジシャンは最初から最後までカードに触らないこと。
10. 裏向きのカードが予言のカードである事を確かめるのは、客自身であること。

如何でしょうか？

これらの条件をクリアーして、ポール・カリーのテーマ、そしてスチュアート・ジェームスのエフェクトに迫ろうと挑戦したのが、以下の 34 名のマジシャン、メンタリスト達による SOLUTIONS です。本編 51 手順と追加 6 手順をどうぞお楽しみください。

SOLUTIONS (テーマへの解答集)

1. FATE (MICK AYRES – U.S.A.)

はっきり言って、このエフェクトはポール・カリーが提案した「オープン・プリディクションという現象に対する条件」をすべてクリアしてはいません。しかしながら、この FATE もかなり核心に迫ったものといえます。

初めにデッキをポケットから取り出して、「1枚のカードを予言として使いたいと思います。」

「私の考えている予言の内容が皆さんにも判るように、カードをお見せしておきます」と言ってカードを見せて名前を言ったら、テーブルの脇に置きます。

デッキを客に渡し混ぜてもらったら、二つに分けて好きな方をマジシャンに渡してもらいます。

「デッキには4枚の同じ数字のカードがあります。予言として「ダイヤの7」を見せましたが、あと3枚の同じ数字のカードがあります。これからそのカードを探して行きますが、まずはあなたのカード、私のカード、どちらを表向きにしますか？」と聞きます。

言われた方のカードを表向きにして、「7」のカードを探します。7のカードが有っても無くてもそのカードの山をテーブルに表向きに置きます。もし有れば(黒の7)、「黒の7がありましたね」等と言います。

また残りのカードを客に半分にカットさせて、同じ事を行います。カードは先に表向きに置いてある山に重ねます。いずれにしても赤の7は出て来ません。

最後に1/4の裏向きのカードが残ります。「これから1枚ずつ表向きにしていきますので、好きな所でストップをかけてください」と言って、トップから1枚ずつ右手に取り、右手を返してテーブルに表向きにしていきます。ストップがかかったら、両手を予言のカードに近づけて、次のカードを予言のカードの上に裏向きに配ります。

残りのカードをまた表向きにテーブルのカードの上に配り出します

「2枚の黒の7の外に7のカードを見ましたか？」と聞きます。客が「いいえ」と言ったら、「ということは、赤の7が見えなかったということですね。あなたは私が初めから出しておいたカードのメイト・カードを見事に選び出したのかもしれませんが」と言いながら、2枚のカードの下側のカードを左手でフェースを観客に向けて掲げて持ちます。そして右手で残った裏向きのカードを取り上げてフェースを見せ、2枚の赤の7を示して完全なメイト・カードである事示して終わります。 <省略>

2. UNANIMIS (MICK AYRES)

一組のデッキとインデックスカード(やや厚手の、カードより大きいボール紙)、マーカーをテーブルに用意しておきます。

一人の客に手伝ってもらい、デッキを取り上げたら「将来の出来事についての予言の実験をしたいと思います」と言います。デッキを客にシャフルさせたら受け取り、デッキをテーブルに表向きにスプレッドして検めて見せます。

スプレッドを閉じたらデッキを左手に裏向きに持ち、その上に先ほどのインデックスカードをのせて「この

デッキと、このインデックスカードを使います。これからあなたが直面する将来のちょっとした予言をしたいと思えます」等と言います。

インデックスカードにマーカーで客に見えるように、「あなたが『クラブのジャック』でストップすることを予言します」と書きます。インデックスカードを裏返して、そこにマジシャンのイニシャルを書きます。次にマーカーを客に渡して、マジシャンのイニシャルの下に客のイニシャルも書いてもらいます。

インクが乾いた事を確認したら、インデックスカードはテーブルに置いておきます。「さてこれで予言は出来ました。この実験をよりフェアにするため、まずデッキを混ぜてください」と言って、客にデッキを渡してシャフルさせます。次にデッキのトップからカードを 1 枚ずつテーブルに配り出してもらいます。好きな所で配るのをストップしてもらい、「その次のカードは、そのまま裏向きのままで、予言を書いたカードの上に置いてください」と指示します。それが済んだら、残りのカードをまた表向きで配り出してもらいます。

配っていく中で「クラブの J」は出ていません。

予言を書いたインデックスカードとその上の裏向きのカード取り上げ、「あなたがデッキをシャフルする前からこの予言は書いてありましたね」と言います。インデックスカードの予言と、観客のストップしたカード両方の表を見せます。カードを表向きにすると CJ であり、予言と一致しています。 <省略>

3. MARKEDLY OPEN (JOHN BARRATT—U.K.)

客にデッキをケースから出させたら、ざっとフェースを見てもらいます。1 枚のカードの名前を予言として言うなり紙に書くなりします。デッキを客にシャフルさせます。

「多くの方は「女の直感」と言う言葉を聞いたことが有ると思います。皆さんは信じますか？私はそういった「直感」は存在すると思いますし、今日はこの場でそれを確かめたいと思うのです。

私は 1 枚のカードの名前を言いました。あなたがデッキをよくシャフルしたので、そのカードがどこにあるかは判りません。いいですね？これからあなたに「直感」を働かせてもらうこととなります。リラックスして、私の言う事に素直に従ってください。

これからカードをテーブルに配り出してもらいますが、1 枚ずつ表向きにして何のカードか見えるようにしてください。そして「これは」と思った、他とは違うように思ったカードがあったらそこで配るのをストップして、そのカードは裏向きのまま横に出しておいてください。そして残りのカードをまた表向きに重ねて配ってってください。

どのカードでストップするかあまり考えすぎないでください。心をオープンにしておけば、その時がくれば判ります。何か他のカードとは違ったものを感じるかもしれませんし、見るかもしれません。焦らなくても必ずそのサインが現れて、あなたに教えるでしょう。さあ、何時でも始めてください」

客は「直感」(?)に導かれて 1 枚のカードを横に置きます。それが予言と一致します！実験がうまく言ったことを告げ、客が直感力に優れた心のオープンな人だとほめて終わります。 <省略>

以下:

4. BRRR! (THOMAS BAXTER—CANADA)

5. SALARIUM (THOMAS BAXTER)

6. 27BELOW (THOMAS BAXTER)

7. POW! (TOM BEGLEY—U.K.)

- 8. 51 FACES SAVED (BEN BLAU—U.S.A.)**
- 9. THE HIDDEN PERSUADER (BEN BLAU)**
- 10. LEFT OPEN (ANDREW BROWN—U.K.)**
- 11. THE BROKEN PREDICTION (ANDREW BROWN)**
- 12. TRIBUTE TO S.J. (ANDREW BROWN)**
- 13. T.O.P. (DAVID BUI—U.S.A.)**
- 14. CUTTING A KEY (DAVID BUI)**
- 15. JOHNNY'S DILEMMA (HECTOR CHADWICK—U.K.)**
- 16. MOST OPEN (VERNON COSMIANO—U.S.A.)**
- 17. A LITTLE MIRACLE! (VERNON COSMIANO)**
- 18. SOMEBODY STOP ME! (OLLY CROFTON—U.K.)**
- 19. AN EXPERIMENT IN THOUGHT (IAIN DUNFORD—U.K.)**
- 20. PATH OF A SHERPA (AARON ENYEART—U.S.A.)**
- 21. IMPROMPTU "L.A.OPEN" (AARON ENYEART)**
- 22. SPONTANE EINSICHT (SEBASTIAN FRIESKE—GERMANY)**
- 23. UNDONE (JOSHA GILES—U.S.A.)**
- 24. MY GRANDFATHER'S CURRY (JON HACKET—U.K.)**
- 25. HACKETING ALDO OPEN (JON HACKET)**
- 26. UNABRIDGED (BEZALEL HERMOSO—PHILIPPINES)**
- 27. SPEEDO PREDICTION (CLAUDE IMPERIALE—U.K.)**
- 28. BRRR! GONE MENTAL (MISLAV KOVACIC—CROATIA)**
- 29. SUMO (MISLAV KOVACIC)**
- 30. YOUR O.P. (MISLAV KOVACIC)**
- 31. NORTHERN NIRVANA (VINCENT MARRA—CANADA)**
- 32. AZTEC OPEN PREDICTION (ALEXANDER MAY—SOUTH AFRICA)**
- 33. cOmPatibility (HIRO OKADA—Japan)**
- 34. EVENING THE ODDS (HIRO OKADA)**
- 35. DIANOGOUS (HIRO OKADA)**
- 36. F IS FOR FATE, FEAR, AND FREE WILL (HIRO OKADA)**
- 37. FINISH OPEN FROM THE START (MIIKKA PAKARINEN—FINLAND)**

38. SHUFFLE CHALLENGE TOO (MARC PAUL—U.K.)

39. OPEN UNCONSCIOUS (MATTEO PERLINI—ITALY)

40. DOPPELGANGER PREDICTION (SHELDON PETERS—SPAIN)

41. O.P.P. (JOSHUA QUINN—U.S.A.)

42. THE OPEN SECRET (TOM RANSOM—CANADA)

43. ISOLATED TWIST (PATRICK G. REDFORD—U.S.A.)

44. ADVANTAGEOUS (PATRICK G. REDFORD)

45. THE O.P. SPREAD (PATRICK G. REDFORD)

46. STANDING PREDICTION (PATRICK REDFORD)

47. JAMESIAN MONTE (BARRIE RICHARDSON—U.S.A.)

48. OPEN SENSATION (TATANKA TAN—U.S.A.)

49. THE TRULY FANTASTIC OPEN PREDICTION (DOMINIC TWOSE – U.K.)

50. LIVING PARALLEL LIES (MICHAEL WEBER—U.S.A.)

51. NARROWING THE WIDE-OPEN PREDICTION (JOHN W. WELLS-U.S.A.)

補足—CONSPIRACY THEORY(仕掛け説)

(補足) **PUBLISHED OR MARKETED OPEN PREDICTION**

これは 1940 年から 2008 年までのオープン・プリディクションについての書籍や記事、商品を年表形式で列挙したものです。

<追加した手順>

編集者の言葉:「THE OPEN PREDICTION PROJECT」を購入して頂いた方から、いまだに多くの前向きなそして熱心なご意見をいただいております、感謝します。皆さまからの親切な言葉や勇気付けがこの仕事に対する何よりの褒美です。

初めに 51 の手順に押さえるために、いくつかの素晴らしい投稿を捨てざるを得ませんでした。それぞれの選択は難しいものでした。私は投稿者も読者も失望させたくありませんでした。

そこで「THE OPEN PREDICTION PROJECT」の初版の時にはずされたものや、その後に本書に刺激されて投稿されたものからいくつかを追加で収録することにしました。追加したものはオープン・プリディクションの SOLUTION やアイデアです。

私が受け取った順番に収録してありますが、それぞれの投稿者に感謝いたします。

THOMAS BAXTER

1. UN-LOCKING THE OPEN PREDICTION (EVAN SHUSTER—U.S.A.)

2. O.P.T.2 (HIRO OKADA—JAPAN)

3. SPECTATOR STACKS THE DECK (TOM RANSOM – CANADA)

4. STOP! (COLIN MCLEOD – U.K.)

5. WHICH WAY IS NORTH? (COLIN MCLEOD)

6. JOHNNY 'S IMPROMPTU DILEMMA (HECTOR CHADWICK – U.K.)

最後に……

実はこの OPEN PREDICTION PROJECT には、\$1,000 の賞金が用意されていました。投票の結果、ARON ENYEART の **20. PATH OF THE SHERPA** をわずかな差で抑えて HECTOR CHADWICK の **15. OHNNY' S DILEMMA** が獲得したことをお知らせしておきます。

—以上、完—

THE OPEN PREDICTION PROJECT

By Thomas Baxter

「オープン・プリディクション」

翻訳： 平賀 義達

編集：（有）フェザータッチ MAGIC

■ この日本語解説書は、あくまでも英書「**The Open Prediction Project**」をご購入いただいた方へのサービス原稿となります。日本語解説書単体での販売はできません。また内容については、フェザータッチ MAGIC が独自に翻訳編集したものです。日本語の全てのコンテンツの著作権は、フェザータッチMAGICが所有します。許可なく複製、転用、販売等の二次使用は一切禁止します。

★ 誤字、脱字、誤訳等がありましたら、ご連絡いただければ幸いです。皆さまのご協力ですらに良いものに仕上げることができればと思います。

日本語版解説書©2015 FTM: *Feather Touch Magic Inc.*

編集・販売：（有）フェザータッチ MAGIC

www.FTMagic.JP



フェイスブック：www.facebook.com/ftmagic

（新製品情報、特別セール情報等はこちら Facebook でチェック）



〒520-0528 滋賀県大津市和辻高城 334-17

電話：090-4284-2670 （竹本 修）

FAX：0120-166-019（FAX 専用フリーダイヤル）

メール：FT@FTMagic.JP